

## 点と点で線に 線と線で面に



私が店を構えたのは、私が住む町の駅前のような物件です。世界の手しごと品を展示販売しながら、中央のテーブルでワークショップを提供する店です。

昔から海外旅行が好きで、その度に各国の手しごとを見て回り、少しづつ買い集めることが私の楽しみでした。こういうものを日本で紹介しながら販売する店ができたら、おもいつきり買い物できるのに。と、思っていました。ただ、そんなことは淡い妄想で、妄想のまま終わるはずでした。ではなぜこうなったのかと考えてみたのですが、思い返してもただその時その時、「やれること」と「やりたいこと」に没頭していただけなのです。

過去に夢中になっていたことが後の仕事や生活に活かされた、ということがみなさんもあると思います。私はそれが「点と点がつながって線になると」というイメージでした。それが今回のお店の件は、「線と線がつながって

でもできる仕事ですので、少しずつは続けていたのですが、身軽な一人の時は請け負える仕事の質が変わってしまいました。フリーランスとして編集者のキャリアを積むという展望は、その時の私には明るく描けませんでした。

家で赤ん坊と二人きりになって、「私はこれまで何のために頑張ってきたのだろう」という感情が時々強く押し寄せて。気持ちに波のある時期でした。

それから、第二子、第三子の出産、度重なる夫の転勤。子どもを産む度に、引っ越しの度に、仕事に対しこだわる余裕さえなくなり、結果として気持ちは楽になりました。子どもがいなかつたら知りえなかつた社会。自分の意思とは関係なく住むことになった土地。今しかできない体験を楽しむなければもつたないと思うようになりました。

小さな面ができた感じです。脈絡なくやつてきただことが、ある日突然、ピピピビ、ガシャンガシャンと組み合わさりました。

### 社会人になつて二〇〇年

就職氷河期と言われた二十年前、大学とWスクールをしてなんとか出版社にもぐりこんだものの、入社すれば自分の力不足を痛感し打ちのめされる毎日。終電帰りと徹夜を繰り返す日々が続きました。それでもほんの少しずつ自信が付き、やりがいも感じていました。

そんな生活が、第一子の妊娠・出産を機にすべてなくなりました。十四年前とはいえ、すでに育児休暇制度などは世の中にありました。ギリギリの人数でまわしている編集部を私が休めば、新しく誰かを採用するしかなく、出産後に私が戻る席はありませんでした。

編集者はフリーランスという立場

**文・写真  
小宮華寿子**  
二男一女の母で  
編集者。「プラジルの手しごと」  
(メイツ出版)著者。世界の雑貨と  
ワークショップの店「メルカジーニョ」  
(<https://mercadinho.net>)代表。

**イラスト・  
デザイン  
寺沼麻美**  
切り絵作家、時々  
デザイナー。「ゆらゆれる北欧風手作りモビール」(ネコ・パブリッシング)を監修。